

岡野浩史先生のご退職にあたって

法学部長 石上 泰州

本学法学部教授の岡野浩史先生は、平成18年4月に本学に着任され、爾来、十余年にわたり、本学の英語教育、語学教育の柱として、また、大学運営の要として、本学の屋台骨を支えてくださいました。定めとは申せ、先生が平成30年度末をもって教授職をお引きになられますこと、誠にもって寂しいかぎりでございます。

先生は、金沢大学の大学院で英文学を専攻され、在学中、文部省給費生として米国ニューヨーク州立大学バッファロー校へ留学されました。大学院修了後の昭和62年4月、金沢市内にございます北陸大学が外国語学部を新設するに際しまして、専任講師として招かれ、大学教員としての歩みを始められました。その後、同大学で助教授、教授と昇任され、英米語学科主任や学部の教務委員長などの要職をお務めになられました。

平成18年度より、ご縁あって本学に転じていただきましたが、それまでの大学運営の豊富なご経験をかわれてか、本学ご着任の翌年には教務部長に任じられ、以来6年の長きにわたりお務めくださいました。教務部長職は、大学全体のカリキュラムを預かる総責任者であり、岡野先生が時々の学長からいかに厚く信頼されておられたかを物語っております。

その後も、就職対策の指揮をとるキャリアセンター長をお務めになられるなど、常に本学の運営を中心的に担われてこられました。受験者数の減少をはじめとして、本学をとりまく諸環境が厳しさを増しつつあるなかで、困難な舵取りの一翼を担われた岡野先生のご貢献は、誠に大なるものであったと、あらためて御礼を申し上げなくてはなりません。

さて、岡野先生のご専攻は英文学であり、門外漢の身には先生の研究上のご業績を云々する資格など、もとよりございません。ただ、岡野先生は、アイルランド出身の英国の哲学者であり、作家・詩人でもある、ジーン・アイリス・マードック (Jean Iris Murdoch) 研究の第一人者とうかがっており、日本アイリス・マ

ードック学会の理事を長くお務めになられているとのこと。この分野でのご研究をはじめとして、先生は、我が国における英文学の学界に大きな足跡をお残しになられたものと拝察しております。

また、岡野先生は本学のカリキュラムにおいては「英語」のご担当でしたが、ご自身の授業のみならず、本学の英語教育、語学教育の全般に目配りをいただいております。さらには、海外での語学研修につきましても、企画から引率にいたるまで献身的にご尽力いただくなど、まさに、英語教育、語学教育の要としてご活躍くださいました。加えて、本学は従前より公務員試験対策に力点をおいできたところですが、先生のご提案と主導により、もっぱら公務員試験対策を念頭においた英語の授業科目を新設して、自ら、ご指導にあたってくださいました。公務員試験の合格者数も年々増加し、本学の最大のアピールポイントとして定着しているところですが、この点につきましても、先生は誠に大きなご功績を残していただいたものと、感謝申し上げるほかございません。

以上のように、本学の研究・教育・運営のいずれの領域におかれても、精力的にお力を尽くしてくださった先生が本学を去られることは、まさに残念至極と申すほかございません。ただし、この4月以降も、今しばらくの間は、先生には非常勤講師として本学の英語教育にお力添えをいただくことになっております。先生には甘えっぱなしで誠に恐縮するほかございませんが、引き続き、本学へのご指導とご鞭撻を賜りたく、伏してお願いを申し上げる次第です。

さて、私事となりますが、岡野先生が本学にご着任される以前から、私は深いご縁をいただいております。私が最初に専任教員として着任したのは、岡野先生とは学部こそ違え、同じ北陸大学でした。新設学部の末席を汚す若造にとりましては、すでに学科主任として大学を牽引するお立場にあった岡野先生は、はるかに仰ぎ見る大きな存在でした。

そして、今なお強く印象に残っておりますのは、先生のお人柄と「大学人」としてのご見識です。当時、その大学は種々の難題を抱えておりましたが、先生は、コトの理非、正邪を冷静に見極められた上、常に理と正の立場から主張、行動されておられました。先生は道理の人、正義の人であり、また、何よりも学生を第一にお考えになる大学人であられました。同じキャンパスの中で、また、同じ教

員集団の一員として、大学人としてのあるべき姿を、そして、困難に直面したときの人としてのあるべき姿を、先生から間近に学ばせていただけましたことは、社会経験のない、駆け出しの大学教員でありました私にとりまして、誠に得難い、貴重な体験となりました。

本学に転じられましてからは、先生のお近くでご指導をいただく機会が尚一層増えました。先生が教務部長職をお務めの頃、教務委員の一員として、新入生へのガイダンスなどに同席させていただく機会が度々ございましたが、そこでの先生のご挨拶は、我々教職員をも深くうなずかせる、誠に教養あふれる、また、説得力のあるお話の数々でした。何かを学ぶということは、自分の努力や科学の力ではどうにもならない領域があることを知ることなのだ、そうした領域に対して人が畏敬の念を持つことはとても大切なことなのだ、といった趣旨のお話を伺ったことがございましたが、一人の学徒として唯々傾聴するばかりでありました。学生を前に、いまだ事務連絡の域を超えることのない駄弁を弄している身としては、いつかは先生のような「大学人」らしい話をできるようにになりたいものだと、恥じ入るばかりでございます。

金沢で過ごしておりました頃は、よもや岡野先生にご退職の献辞を捧げさせていただく機会が訪れようとは、想像すらできませんでしたが、ご縁とは誠に不思議なもの、あらためて感慨にふけざるをえません。末筆ながら、万感の思いを込めまして、感謝と御礼を申し上げます。岡野先生、ありがとうございました。